

(126) 栃木県桐生市の朝日沢鉱山

最近、栃木県小山市の近郊に位置している、足尾山塊中にあるマンガン鉱山の探査を、頻繁に行っている。前後するが、桐生地域菱村方面の鉱床図である図3⁽¹⁾中にある⑨、⑩、⑫の黒川鉱山の探査結果は既報である。この図3から、仙人ヶ岳頂上の北で、塩瀬に流れ出している沢の周りに幾つものマンガン鉱山があったことがわかる。が、この図3のような鉱山図だけで、鉱山跡にたどり着けるのは、至難の業であることは、著者は十分に経験済みである。もっと十分な裏付けが必要である。運良く、他の資料⁽²⁾で、朝日沢鉱山に関する解説記事を目にすることができた。その文献中の図を、図4、図5として複写掲載しておいた。2つの参考文献を見て、実は頭が混乱した。図4と図5からは、朝日沢鉱山は仙人ヶ岳頂上の北側にあり、頂上から大凡200m～300m。標高は大凡500m当たりにあることがわかる。が、図3では、このあたりは、⑦上菱鉱山の位置である。図3では、朝日沢鉱山は⑤の位置にあり、仙人ヶ岳頂上より北方に大凡1km離れている。どちらの文献が本当なのだろうか？ と言っても、実は2つの文献とも同じ著者である。が、出版年が、1969年と1952年。大分離れている。鉱山の名称は良く変わることもある。より明瞭で、明確な参考文献(2)を是として、今回の探査した鉱山名は「朝日沢鉱山」とした。隣り合う沢中の3カ所で、坑口跡、残留鉱山設備、ズリ跡を見つけることができた。

この鉱山への経路は次の通りである。桐生市内から、66号を北東方向に、桐生川に沿って進んでいく。梅田地区に入り、道路右手に梅田中学校を見て、その少し先で右折をし、桐生川を渡る(図1で、細部を参照)。そして直ぐに右折、左折を繰り返すと、坂道的前方に神社が見える。神社の左側に道が見える。道路を横断し、この林道に入っていく。後は朝日沢に沿った林道を素直に登って行く。林道は、図1中のP点で終了している。ここで駐車する。

ところで、朝日沢及び、その支流沿いに幾つもの鉱山があったことが、図3よりわかる。幾つかの支流沢の下準備的探査も行った。マンガンの転石、マンガンの露頭鉱脈を見つけている。その内に、十分な探査を行うかもしれない。

探査日 2013年6月～7月

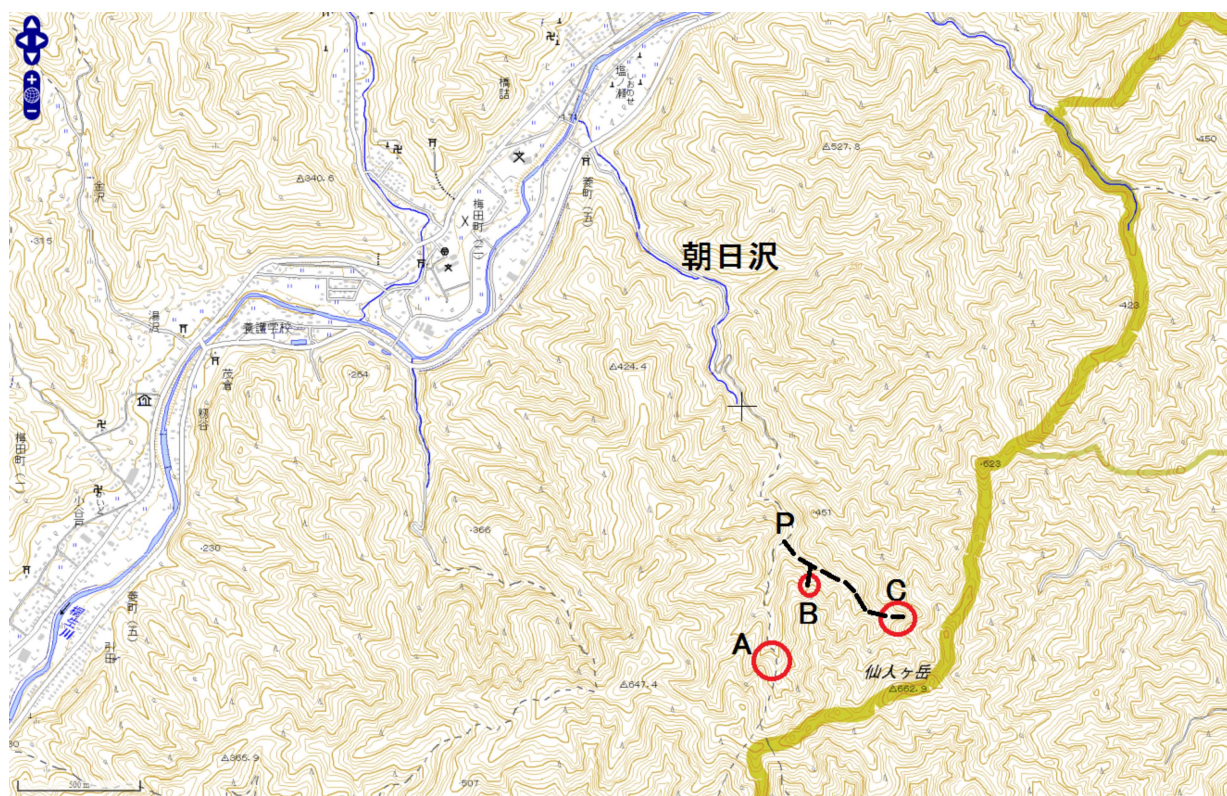


図1 国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。桐生川の右岸に沿って66号が走り、左岸にも桐生市内に通じている道路が見てとれよう。この道を利用するのも良い。P点が車を駐車した場所。林道の終点である。赤丸が探査の結果確認した3カ所の鉱山跡。区別のために、各鉱床跡をA、B、Cと呼称する。PからAまでは山道が生きている。PからB、Cへは、最初、沢を登ることになるが、その内に山道が生きてくる。図中に沢筋の経路を黒破線で書き入れている。

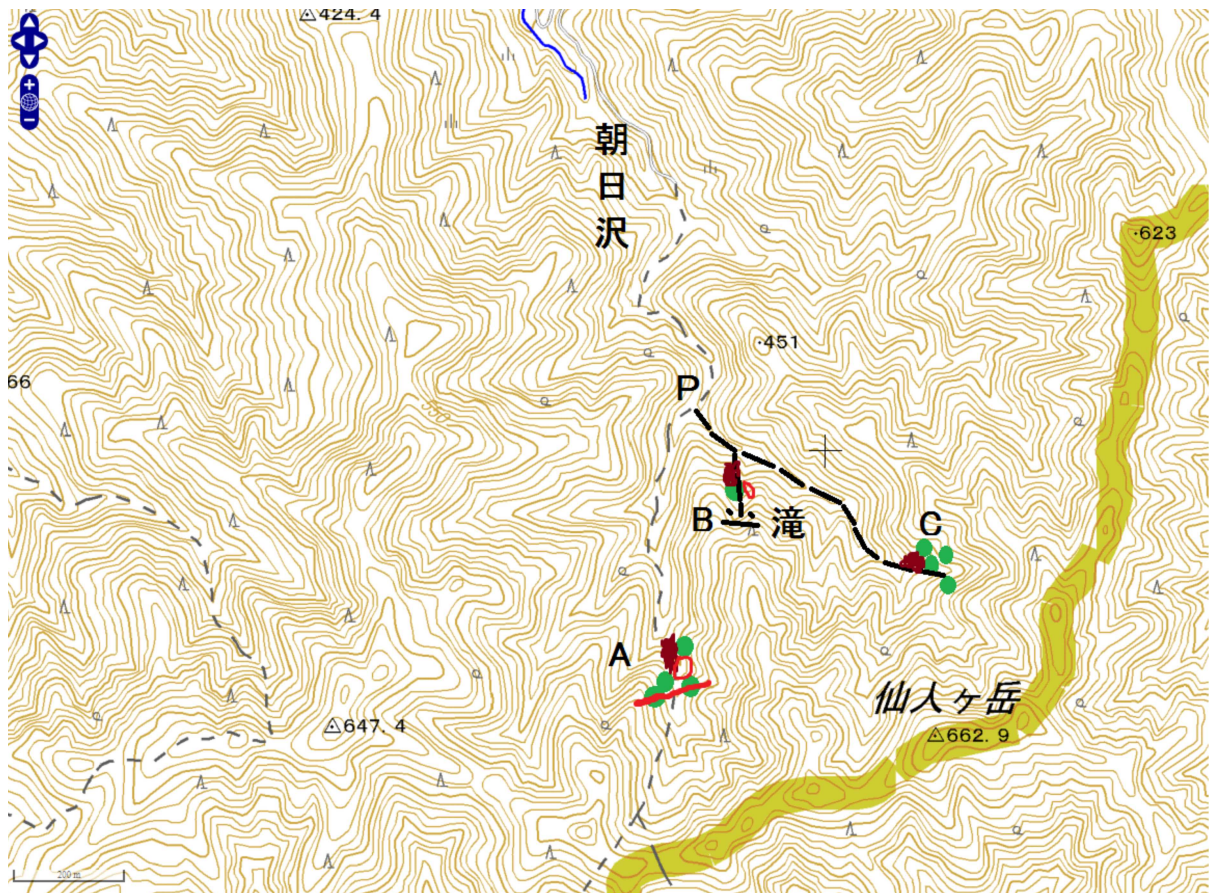


図2 図1の拡大図。神社の脇の林道を朝日沢に沿って登ってくると、標高360mあたりの所で林道は終了。目前には一応立派な橋が架かっている。橋の先、右手には、沢に沿って山道が延びている。橋の先左手には、山道らしきものはないが、沢に入って登って行くと、山道があったりなかったり。図中の黄緑丸は坑口跡、茶色ベタはズリらしい跡。赤線分は、沢を横断していると思われる鉱脈跡。赤丸は鉱山施設跡らしい箇所。

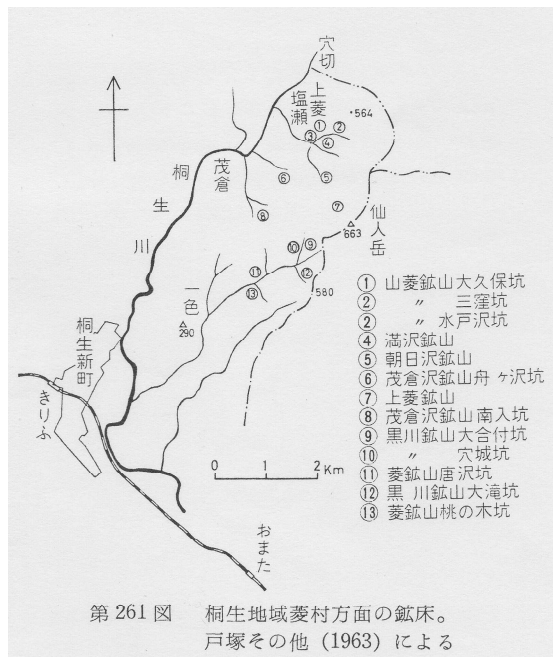


図3 参考文献(1)より。黒川鉱山⑨、⑩、⑫の探査結果は既報である。今回は⑦(上菱鉱山ではなく、朝日沢鉱山とする)の探査を行った。なを、現在、図中の⑤の鉱山跡の確認はできていない。

①、②、③、④あたりの沢で、マンガン鉱石を見つけているが、まだ鉱山跡の確認には至っていない。

⑧茂倉沢鉱山は、栃木県地学愛好会の定例採集会で訪問済みである。

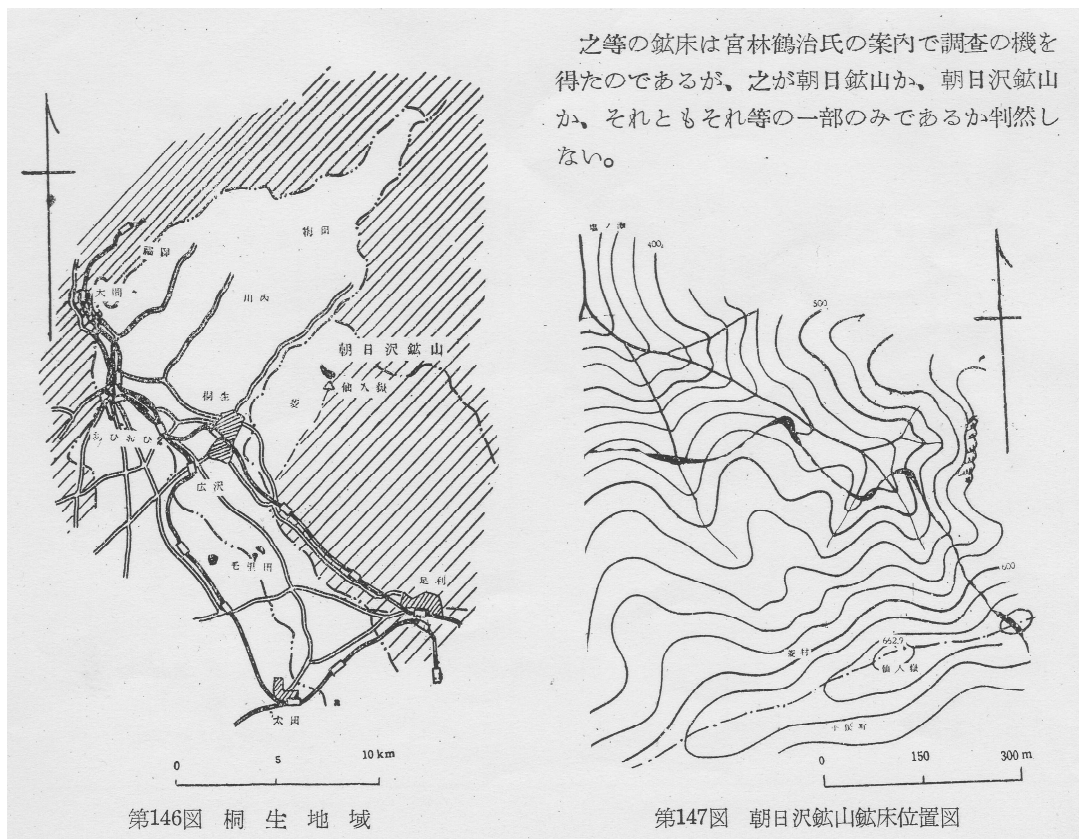


図 4

図 5

共に、参考文献（2）より。図 4 には、朝日沢鉱山だけが記載されているが、この地域には数多くのマンガング山がある。それらの記載は省略されている。こちらの文献の内容を優先して、今回探査報告をする鉱山名を朝日沢鉱山とすることにした。が、図 5 をよく見ると、上部の文章に、原著作者の何か頼りない記述がある。しかし、今のところ無視する。図 2 の探査結果と、図 5 を対照すると、その一致はまあまあであろう。

鉱山跡写真



写真 1 図 1、図 2 の P 点の所で、林道の終点である。何故か立派なコンクリート橋が架かっているが、その先に林道はない。橋の先右側には山道があり、A 鉱床跡に行ける。左側に行くと、山道は無く、沢に入ることになるが、先では山道が復活している。B 鉱床跡、C 鉱床跡に行ける。

A 鉱床跡



写真2 沢の右岸で、鉱山施設跡の少し手前にあった坑口跡。中央の黒い部分。冷気が吹き出していた。奥のどこかが地上に出ているはず。この位置から少し上流の坑口跡と繋がっているであろう。



写真3 写真2の坑口跡から少し沢を上流に登った所にあった、鉱山施設跡の1枚目。ウインチ、ボンベなどが朽ちていた。



写真4 鉱山施設跡の2枚目。ヤンマーのエンジン、コンプレッサー、その他諸々。



写真5 鉦山施設跡の直ぐ上、谷を跨いだ両側に、縦長の坑口跡があった。その内の一つ。谷を横断して、露頭マンガン鉦脈があったのであろう。

B 鉦床跡



写真6 駐車場から橋を渡り左側の沢に入っていく。途中、右側の大きな支流沢の少し上流にあった坑口跡。中央が坑口跡。苔むした岸壁の真ん中が、石組みでしっかりと閉塞されている。が、坑内水が少しづつ流れ出している。一体にズリがある。ここから、画面左手上流に、施設跡らしいプラトーがある。その先には、落差の大きい滝があり、行き止まり。



写真7 石垣の上部の隙間から撮影した、閉塞された坑口の内部の様子。



写真8 坑口の少し上流にあった、落差の大きい立派な滝。

C 鉱床跡



写真9 B 鉱床跡から、元の沢の出合に戻り、上流へと登って行く。緩やかになった谷の左側斜面に、幾つかの坑口跡が見えた。斜面一帯ズリである。

山中の鉱山へ往来するため、当時は山道が作られていたはずである。が、廃山となり、人が通らなくなると、自然に戻ってしまう。しかし、付近の林業が生きていれば、旧鉱山道は、便利な作業道となるので、人手が入ることになる。近年、手の入らない山林が多いような気がしている。



写真10 上記の坑口跡の一つに接近して撮影。



写真 1 1 坑口内の様子。非常に綺麗である。

採集鉱物写真

特になし。

参考文献

- (1)「日本のマンガン鉱床補遺 後編」、吉村 豊文、1969年。
- (2)「日本のマンガン鉱床」、吉村 豊文、1952年。

付記

実は、今回の探査場所付近の視認した現状地形が、現在の地形図（図2）と一致しない。図2中において、P記号の右上の・451の少し上に、等高線からすると林道から東南東方向に沢（図2中に「沢？」を記している）があると読み取れる。が、現地では、この沢が確認できないのである。林道上において、何度かGPSで測地したが、現地が谷筋であるので、受信状況が悪く、測定の度に、異なる値を出すので、信用できない。尾根筋を登り上がって、見晴らしの良い所で、測地すれば解決はするであろう。木々の枯れた時期に、測地を試みるかもしれない。もしかすると、地形図が細部において間違っているのかもしれない。